

◆teku-teku共同企画2016★石田先生の計画地区3／八郎潟企画（活動記録＋評価結果）◆

企画■石田頼房先生の計画地区を歩く（その3）—海拔-3mのむらづくり・八郎潟干拓地農村整備計画—
（TMU都市と住宅を考える会・第21回国内現地研究会との共同企画）

日時■2016年7月15日（金）11:30～18:00

コース■奥羽本線八郎潟駅＜集合＞—（送迎バス）—八郎潟干拓地圃場・緯度経度交会点—総合中心地：ホテル・サンルーラル大潟＜昼食＞—大潟村干拓博物館（木村先生講演・見学）—道の駅おおがた～入植者住宅地～大潟村公民館～情報発信者入村地～墓地公園～集合住宅地区～中心ゾーン歩行者道（小中学校・保育園・診療所等）～中心商店街＜交流会＞

講師■木村儀一先生（明治大学元教授）、宮田正植様（元大潟村長・現ルーラル大潟会長）、
田中 司様（大潟村教育次長）、加藤光行様（大潟村総務企画課長）

参加者■◎加藤仁美＋梶川義実、○石田周一＋石田克二、姉齒道信、大竹 亮、大谷昌夫、小川美由紀、
木村儀一、栗原 徹、嶋沢裕志、重永真理子、高見澤邦郎、野口和雄、藤井祥子、古里 実、
葉袋奈美子、村松紀明（以上18名、敬称略、◎コーディネーター、○特別参加）

企画主旨■

石田頼房先生の研究理念は、「生活の質の向上」であろう。

石田先生の恩師高山英華先生の卒業計画は、千葉県房総の漁村計画であった。その弟子であった石田先生は、高山先生から1959年に秋田県八郎潟の農村計画を作るように言われた時、この仕事を自分が担うことで農村の生活の質の向上を実現しようと考えたのではないかと。高山先生からは、「これはコルホーズだぞ」と、言われたそうである。石田先生は、農民の生活の質の向上を実現するための計画づくりを行った。東秀紀先生の著書によると、入植者の状況により修正があったものの、計画コンセプトのおおかたは守られたとのことである。

50年を経たいま「計画者である先生の思想・発想がどのように実現されているのか」「入植した住民にどのように評価されているのか」について、現地を見て住民や行政関係者の話を聞き、プロジェクトの成果と現在を把握したい。石田先生とともに八郎潟干拓地農村計画委員会に参画された木村儀一先生（当時、明治大学・浦良一教授の下で助手、後に同大学教授）が同行・解説下さるという貴重な現地研究企画である。



参考：八郎潟干拓地の中心地計画（石田頼房、SD22/1966.10）

<参加者の意見・評価>

1 ■八郎潟干拓地農村計画、特に大潟村中心部を訪問し、どう思いましたか？

- 近代的な農業経営を主体としながら、大変合理的な街並みと土地利用が広がるニュータウンであった。干拓事業直後の入植者の闘いと尽力により、長い時間を積み重ねてつくられた自然と共存しゆつたりとした住まい方が想像できた。一方、メンテナンスにかかる費用とシステムに関心を抱いた。
- 農村らしからぬ農村だった。一面の大規模経営農地が広がり、中心部にはみどり豊かな計画市街地が存在していた。公的施設を核として歩行者ネットワークが続き、瀟洒な住宅が並んでいた。街路の両側には樹林やお花畑が連なり、美しい景観を形成している。住宅地環境や生活機能も高水準で暮らしやすそうで、新しい施設も順次できて将来への発展性が感じられた。最近の諸論文や報道によれば、人口や農業に将来への希望があるのが何よりである。
- 大潟村中心部は思ったよりも普通の住宅地だったが、スケール感は一般的住宅地とは違う。また、大きく育った樹木と道路沿いの花や家々の生垣が、美しい景観を形成している。
- クルドサック、緑地帯、緑道、開放型役場など提案が豊富にあり、また、住民が提案を理解し生活している。
- ホテルや博物館など良い水準のものが建てられたのは、訪問者に良い印象を与えていると思う。観光客とまでは言えないまでも、視察などでの訪問者は結構多いようだ。
- コンビニやチェーン店がない分、落ち着いた印象を受けた。
- やはり、ここまで大胆に土地利用をはっきりと分け、日本離れした農村が実現していることに強い感慨を覚えました。山手線がすっぽりに入る農地部分には都市的インフラが一切ない潔さ。必要ないものは用意しないと割切ることにより生まれる「合理性の美しさ」を感じました。
- 中心部住宅地の印象は、ニューアーバニズム、10数年前に訪問したサンフランシスコ郊外の「ラグナウエスト」、都市的な生活空間となっている。
- 様々な要因が重なったとは思いますが、計画の持ち得るプラスのチカラを現地で受け取ったように思います。
- 農業政策、地域政策の中、あるべき農村街づくりを研究、検討された先生の楽しい経験をうらやましく思いました。また、所有権や地価、規制の多いチマチマした市街地の街づくりに比べ、ゆとり豊かな空間での計画は異次元に思えました。しかし、ハレの要素が欲しい中心市街地が、密度が低く都市的活性が作り出せるようにはならないのでは。(求められているのか分かりませんが)
- 私が大学を卒業した1966(昭和41)年に入植が始まり、その人たちの50年の生活が私の50年と重なり町が生きていることに感動しました。
- 42年ぶりに八郎潟干拓地を訪れ、まず以前の記憶が私の中でほとんど残っていなかったことに驚きました。少々自分に落胆しました。公民館の展望塔もできていたはずなのですが、登った記憶がありません。ただ、建て替えられた小・中学校の以前の校舎とカントリー・エレベーターを遠くから眺めた記憶があるので、それが展望塔からの景色だと考えています。細街路などは未舗装の部分も多く、村(総合中心地―当時はどなたも「総中」と略称で呼んでいました―)全体が埃っぽかったと記憶しています。赤や黄色などの三角屋根の入植者用住宅がずらりと並んでいたのは鮮明に記憶しています。当時から増築はかなり見かけられました。入植者の方からも、「故郷の家を解体して持ってきたのでそれで増築した」というお話を聴きました。増改築から建て替えへと進んでいることは、事前の木村儀一先生のレクチャーで承知していました。景観上の変化では、ほとんど草原だった市街地や農地に松などの林が大きく成長して繁り、豊かな木陰を形成していたことがいちばん大きな変化でしょうか。私が以前に訪問したのは1973年ですから、まだ第5次(最終)の入



総合中心地の街路沿道に植えられたサルビア群



その後整備された干拓博物館と物産市場

植者の方々が入られる前です。商業施設なども今よりさらに不備で、応接して下さった新農村建設事業団の方の運転で、なにかというと秋田市内へ出かけていました。当時よりはその頻度は下がったかもしれませんが、入植者（村民）のみなさんは生活物資購入などは村外へクルマで往復されているのではないのでしょうか。休日の文化・娯楽も村外で充足されていると思います。この点では、第三セクターのホテルが整備されるなど、大幅に都市的要素も備えてきてはいますが、当時、宿泊は事業団の官舎を使わせていただきました。東京からのアクセスも、往路は上野発の寝台特急であったのが隔世の感です。

2 石田先生の計画意図は（事業の中で、その後において）上手く実現していると思いますか？

- 合理的な計画理念に貫かれ、生活しやすい空間構成が実現した中心部を歩き、石田先生の理想が実現できたのではないかと思った。設計の木村先生との連携も良かったのではないか。伝統的な農村風景と全く異なる都市郊外のニュータウンのような農村集落が居住者にも評価されているようで、すばらしいことだ。
- 市街地を全村で1カ所に集約し（総合中心地）、そこで都市機能と住環境を確保するという計画意図は、その通りに実現している。拡張用地も十分にあり、地域振興や人口増加に対応できている。全くスプロールが見られず、都市計画の理論がそのまま現実化した貴重な成功例であろう。
- 近代的な住まい方の展開できる配置計画（住居群と公共施設・生活利便施設の集約配置）がバランスよく機能していた。施設の建築計画も、初期の増築を想定した住居計画も、壮大な緑とマッチしていた。当初の共同作業等とはとっくに行われなくなったとのことだが、住居群周囲（道路沿い）の植栽を街区ごとの居住者が維持管理し、緑景観を競い合う行事も続いているとのこと、コミュニティの継承に希望を持つことができた。
- 散村化せずに住宅エリアを集約化したことがとても効果的だったこと。村の都市的な投資（博物館や温泉・ホテル建設など）が効果的に機能してきたものと思います。
- 大きな地震でも崩れない市街地部を作り出したことも、科学的合理性がもたらした美しい成果だと思います。
- 上手く実現されていると思う。保留地的な緑地と学校の境がないような形で溶け込んでいるなど、具体的計画をしないことも「計画」のうちなのだろうか。
- 自動運転の自動車を導入しやすそうに見えるので、高齢者にとっても移動手段は大丈夫そうだ。
- 全体構成と住宅地については当初計画にかなり忠実で、計画意図が概ね実現されていると思うが、商業施設については当初の目論見からは変わってきているように見えた。中心部に町機能と居住地を集約したのは、地盤の耐力条件のためだったのか、そうでなければ屋敷林に囲まれた農家が点在する日本の原風景的計画があったのか、新たに出現した土地の分配策が影響しているのか、計画時の1960年頃、ソ連のコルホーズ政策は影響していたのか、など石田先生に聞いてみたかった。ただし、コンパクト性能を生かす意味で、歩行者の距離感を生かす工夫があっても良かったのではないか。この村は入植完了すれば拡大はないのだから。
- 抽選、話し合いと平等民主主義の事業進行、入植者の豊かな生活を確保する計画、生活の変化を先読みするプランなど実現している。しかし、社会の変化はドンドン進んでおり、人口減への対応、土地利用の変化への対応など計画の前提条件を崩す変化への対応に耐えるか見守りたい。
- 木村先生などの功績でもあると思いますが、魅力的な住まいや同じ夢を持った仲間とともに夢のある農村の暮らしを作りだせるような仕組みとしたことも大きかったと思います。一方で、限られたとても恵まれた人達を作り出してしまいました。農家数・人口がほぼ一定であるという理想郷は他者を寄せ付け難い閉鎖的なコミュニティを作り出しているようにも感じました。
- 計画と建築を較べたとき、計画者のコンセプトが実行者（行政）によってどのように採用されたかを読み取るのは結構難しい。しかも当初の計画が社会経済の変転の中で変化していくわけだから。他方建築家のコンセプトはその時代に「建築物」として刻印され、時代が経った今も目に見えるので観察できる。コンセプトが見えにくい計画者よりモノが残る建築家の方が仕合わせなのだろうか、それとも残ったモノが当時の目でなく今の目で評価されてしまう建築家の方が不仕合わせなのだろうか。
- 少々ためらったのは、この計画のうちどこまでが石田頼房先生個人のお仕事で、建築学会や都市計画学会、高山英華先生や浦良一先生、木村先生らの共同作業としてなされたものがどの範囲なのかが判然としないことです（このことは小国町についても同様です）。その点はひとまずおいて、当初の計画意図はかなりよく実現していると感じました。数ヶ所に分散して集落を作るという案が、農家の経営規模の拡大や、軟弱なヘドロ地盤の制約などから「総合中心地」一ヶ所に集約され、そこに生活・行政・教育などの諸施設も集約し、耕作地には「通勤」するという全体計画がよく維持され、熟成されてきています。日本の農村に見られる散落状の集落というイメージは、ここには全くありません。その意味では、計画意図は上手く実現した、と言えます。ただ、総合中心地のスケールが人間の歩行を基本としているとは言えない大きさで、大半の居住者

がクルマで移動していると思われます。(7月の暑い炎天下のためもありますが、)まちなかを歩いている人、自転車の人などまったく見かけませんでした。この点も踏まえた上で計画が立案されていたのであれば、それは「計画通り」だと言えますが。石田先生にお聴きしてみたかった点です。

- 先生は、<計画づくりから離れて数年たった1981年に家族と一緒に訪問した。「八郎潟中心地とかけて、分かれた妻と解く」という気持ちなる大分前のことである>と書かれている。そして続けて<八郎潟はその後大きく変わったようだ、しかしもう一度「かけて」「解き」、そして「心は」と問うわけにはいかない>と(以上、『二人で歩いたまち・むら・人生』2006年より)。これは、「まち」が社会の変転の中で時間をかけてつくられていくこと、その中での計画者の立場や思いを語られたフレーズであろう。



大都市郊外ニュータウンのような農家住宅地



中心緑道に沿ってならぶ公共施設群

3 ■大潟村のまちづくりの現在の課題をどう捉え、今後どうしていけばいいと思いますか？

- 大潟村は、地方自治法の改正により、開発地と自治体の領域が完全に一致している稀有なケースであり、ニュータウンで問題となる開発後のエリアマネジメント主体が不在、という悩みはないようだ。今後は施設更新に時期になるが、当初の計画理念を十分に踏まえたうえで、更新によって中心部全体が良くなるような対応を願いたいもの(当初計画されていた小中学校の一体化が、近年の建替えによって実現したように)。
- 農業経営が安定しているので現時点で大きな課題があるようには見えないが、単一産業に依存するリスクは大きいので、村として多角的な経営を考えることが必要だと思う。
- 農業の生産性、競争力の維持。
- 人口減、土地利用の変化、入植者後継の意識変化が課題。変化についていく行政、居住する住民の積極的研究、検討、話し合いが引き続き望まれる。
- 一つの桃源郷(ユートピア)を見てきた気分です。それが壊れるのは、かつての減反政策のような外部的な大きな変化なのでしょうか。さしずめ直近ではTPP問題の影響が気になるところですが、すでにその対応はできているようにも思えました。最早心配ないでしょう。
- TPP対応も含め、大きな課題は地域の持続性なのでしょう。しかし、例えば、案内ボランティアによれば世代間の引き継ぎもスムーズな様子、正味一日の訪問では喫緊の課題は判りませんでした。
- 緑地を維持する(手入れをする)ために住民が力を合わせるしくみをつくる。
- 緩やかな建築規制の導入。
- 今後の社会の健全な発展のために少しずつ取り組んでいる社会の多様性について。移住初代の人達はフロンティア精神があり、二代目あたりまではその影響が残るでしょうが、100年後・200年後に内部の安寧だけに収まってしまうと衰退に向かうかもしれない怖さを感じます。新たなリタイア層の移住策(情報発信者)やサービス産業従事者の外からの風をどれだけ村の人達が感じていけるか。長い目でみていきたいと思いました。(人生の最後にもう一度行ってみたい)
- 文化・芸術関係者などの農業以外の方の移住による地域の活性化(例えば、当日訪問した彫刻家+バレエの先生ご夫妻の移住のような)。
- 旧来からの居住者と若年世代との間の断絶が聞かれたが、空間が豊かであるだけに、多様な住まい方が展開できるのでは、と将来への可能性が感じられた。とくに、個性的生活スタイルの外部居住者による居住街区や、親子近居世帯用の居住街区等も設けられており、広大な土地の中での今後の展開が期待される。また、農業政策の大転換の荒波の中で、どのような農業経営をしていくのか、生活設計をしていくのか、とくに若年層や婦人会等の活躍に注視したい。

- 初代から2代目への世代交代は継続されているようだが、若手(3代目)への継承が課題という説明があったのが気がかりなところ。
- 基本的に大きな問題は生じていないと思います。第1世代の入植者の方々は理想と困難との中から今日を作られたことをたいへん良く承知されており、おそらくは次の世代にもその経験と見識は伝達されていると思います。しいて課題としてあげるとすれば、さらに若い世代、干拓そのものを既にそこにあるものとして受け止めている世代の方たちが、よくも悪くも、開拓者としての自負と矜恃を持って営農に従事していけるのかどうか、ということでしょうか。外部から見て、大潟村は「特殊なケース、特殊なコミュニティ」である、という認識が周囲の地域にあるとのことですが、特殊性がもたらす問題については、長期の歴史的審判を受けなければ判断できない問題だと思います。



最近建替えられた一体建築となった小中学校



総合中心地の外には見渡す限り優良農地が広がる

<補 論>

- 総合中心地―集落の誕生：この計画は1948年の農林省原案に始まり、1960年の農村建築研究会が計画条件とした農家戸数4000戸、非農家1000戸から最終案の入植農家580戸に至る過程で、入植農家への配分農地、すなわち経営規模が戸当たり2.5haから5.0ha、7.5ha、10haと変化の過程があった。これの配分農地の規模拡大に対し入植戸数は減少し、建築学会案は8集落案、3集落案とこの変化に総合中心地―集落案と対応した。
- 生活施設の整った総合中心地：集落の人口規模は、非農家、農業短大生を加えて約3000人、周辺の最も近い上位都市の船越、一日市に15～20kmの距離があり、大潟村村内に第2次生活圏域内に整えるべき生活環境（施設）、都市レベルの施設環境が提案された。八郎潟建設事業団の解散後に、大潟村は単独事業として、住民の求めに応じ幾つかの地域施設の整備が加えられ、今日に至っている。
- 安全・安心な居住環境：集落居住地域、すなわち総合中心地は東西1000m、南北2000mの200ha、農業集落としては都市地域並みのコンパクトな集落・住区計画が求められた。住区内の農家宅地からは農業生産に関わる施設を、居住地区の隣接地に集約し、集落居住空間から生産施設を排除し、生活と生産を分離した生活環境・集落空間の案が示された。また集落内の道路体系、歩車分離、緑道を使つての中央に配置された公共施設整備ベルトへのアクセスは、安全街区化を目指すものであった。こうして整えられた環境は、入植者第一世代からは、出身集落の環境と比較し満足した様子を語られて来た。しかし大潟村に生まれ、育った第二世代はこの環境からのスタートであり、今後もさらなる住みよい居住環境を求めの改善が積み重ねられるであろう。基本的な環境が整いスタートして、昨年（2015年）大潟村は誕生以来50年を迎えた。この先50年100年を考えれば、村づくりは創設期から独自の自立される期を迎えられたと言うべきであろう。
- 大潟村の変化する集落風景：今日、大潟村総合中心地は大きく育った黒松の防風・防雪林に囲まれた緑多い静かな集落・居住地となった。住宅の寿命は50年～70年といわれるが、住宅は増改築から更に進み建て替えが多く見られ、ハウスメーカーの進出も散見され、住区景観の変化が進行している。
- 大潟村らしい集落景観の誕生に願いを込めて：今後のことになろうが、入植者の北から南の広い地域からの出身者で構成され、これらの人々に築かれてきたユニークな条件の大潟村を考えるならば、独特な暮らしのスタイル・文化が生まれる可能性が考えられ、これにこの地特有の季節への対応が加わり、この地に相応しい構造・形・規模の新しい特徴の有る住居が生まれるであろうと想像する。やがて、そうしたものが反映した住居が定着し、町並みが形成されるであろう。このためにも、早急な集落内の土地、集落空間利用に何らかの秩序を作り出すルールを検討が待たれるところである。新しい大潟村特有の文化の醸成は、大潟村誕生

の背景や村発足以来、村内に発生した社会・農業問題など、今日までの事実過程を村民が共有することが重要であり、こうした連綿とした事実は明日への成長の糧の一つであると考えます。大潟村らしい特徴ある地域景観・空間秩序が醸成されることを期待する。願わくば 更にこのことが広く我が国の農村集落空間・社会の今後の姿、農村集落の環境整備目標の一つとして結実することを望むものである。



千拓博物館での木村儀一先生の講義



新たな居住者に対応したアトリエ村住宅地

4 ■ 今回の企画に対する意見・感想など

- まったく新しい村を計画的につくるといふ、日本では稀有なプロジェクトであり、その空間を体験するだけでなく地元の方々の話も聞けて、とても参考になった。
- 国策としてのモデル農村であり、半世紀経た今も優遇措置があるのか。あるとすればあくまでモデルとして感じなくてはなるまい。外周の耕作地をバスで走って見たが、長辺が1kmあるという田畑の実際のスケール・距離感を感じてみたかった。実態は知るべくもないが、裕福な農村生活が営まれていると信じたい。
- 主に農政問題で国や県と激しく対立した難しい地域と聞いていたが、宮田元町長のお話を聞いて事情が理解できた。地元の初年度入植者の方々の話も、とても貴重だった。空間計画だけでなく、農業経営やコミュニティ形態まで、まさに「実験的な社会計画」であり、コルホーズ的ともいえる。そして、それを担ってきた地元の皆さんの自負と愛着が伝わってきた。
- 水稻に重点を置いた計画であったが、ハウスが増え多様化が進む中、今後の農業の変化がどうなるのか気になります。都市計画の重要性は、必要な現実の要求への対応と、将来の変化への対応余地をどう計画に盛り込むか、と考えます。余地が100年か200年か楽しみです。
- 外的には農政&農業をめぐる諸変化、内的には高齢化や後継者はいるものの世帯分離の進行。……何を維持継承し、他方、どのように新たな展開を図るか、常に考える必要がありますね。都会のサラリーマン/ウーマンとは違う緊張感を持って生きておられる大潟の皆さんに敬意を表し、エールを送ります。
- 幹線道路の脇に30mの緩衝緑地帯が作られていることの美しさ。草は短く刈られ、歩道がなくともそこを歩く気持ちよさ…。
- 集落ごとに協働で管理されているサルビアの花壇は美しかったが、すべて同じ花に統一されていることに違和感があった。アジサイやその他の花木もあるが、なぜ花壇には自主性を持たせないのだろうか…。
- 何も作る必要がないと考えられていた農地部分にコンバイン・トラクターの小屋兼トイレなどの施設が作られていることは、計画的には想定できなかった部分。こうしたところには、計画意図を入れようという話はなさそうだったのが印象的だった。
- 一次入植者も含めた地元の方々との接点が長時間であったため、見学が一日だけだったとはいえ、大潟村の過去から現在まで触れることが出来、結果情報量も多く（常に同行する案内ボランティアの存在は大きいですね）、大変に勉強になったように思います。
- 42年前にも入植者の方々からお話を聴いて、その明るさに感銘を受けましたが、今回も（千拓博物館での）ガイドのボランティアや、懇親会の席での地元の方々とお話をする機会を作ってください、たいへん得るところの多い旅になりました。地元でお世話戴いた方々と大潟村のみなさまの、ご健康と長寿、農業の順調な発展をお祈りします。
- 石田先生が「八郎潟中心部とかけて別れた妻と解く」と語られ、どんな様子が見るのが怖い（「二人で歩いたまち・むら・人生」）とされていた現地に出向き、いやいやとても素晴らしい方でしたと報告したい気分になった。そして先生の居住者の視点での「計画主義」という原点にふれた気がした。

●木村先生を講師とした事前勉強会が有効でした。

●今回は参加させていただき、ありがとうございました。事前の勉強会にも参加しましたが、父の仕事に関しては門外漢なので、計画意図など、いまひとつ理解できずに過ごしました。「別れた妻」の意味もどうも理解できませんでした。（みなさんのご感想などから学ばせてもらいます。）しかし、まっすぐに伸びた道路、広々とした水田、整然とした街並み、そして干拓博物館の展示などじかに触れられてよかったです。ぬかるみにはまったトラクターの展示など興味深かったです。また、元村長さんも参加してくださった夜の交流会の熱気、減反政策で二分された村のことなど直接聞けて良かったです。



経緯度交会点（北緯 40 度×東経 140 度）にて

<コーディネイターより>

戦前の少数の大地主・多数の小作人という農業・農村構造を変える戦後農政の象徴として、米国やソ連の大規模・機械化農業をモデルとして計画されたのが、八郎潟干拓・大潟村づくりであった。しかし、八郎潟の干拓が終わり、米の生産が出来るようになったころ、農業・農村を取り巻く環境は大きく変化し、減反、ヤミ米など大潟村をめぐる動きは、どちらかというとなガティブなものが多かったことは皆様ご存知のとおりである。

その、大潟村の計画に石田先生が深く関わっていたことを知ったのは、大きな驚きであった。それまで、考える会の諸先輩方からは、吉祥寺の話は聞いても大潟村のことは聞いたことがなかった。大潟村は、石田先生の理想とするまちづくりのひとつではないか。「大潟村に行きたい、是非行くべきだ」との思いが強くなり、今回の企画となった。

「木村先生、石田周一様、石田克二様はじめ皆様と一緒にできて良かった！」というのが、コーディネイターである私の感想だ。大潟村を訪問し、宮田元村長はじめ大潟村の皆様のいろんな話を聴くにつけ、これまでのまちづくり、しごとづくりそして人づくりの経験は、国内外でもっと共有され、活用されるべきであると、深く思った次第だ。

最後になりますが、当日、講師をお務めいただきました木村儀一先生（明治大学元教授）、宮田正徳様（元大潟村長・現ルーラル大潟会長）、田中 司様（大潟村教育次長）、加藤光行様（大潟村総務企画課長）、企画実現にご尽力いただきました各位に深く感謝申し上げます。（梶川義実）

<付 録>

石田先生のエッセイ集「二人で歩いたまち・むら・人生」には、八郎潟干拓地について次のように記されています。

「八郎潟中心部とかけて別れた妻と解く」、その心は「どんな様子が見るのが怖い」